

蓮沼むらづくり協議会規約

第1章 総則

(名称)

第1条 本会は、蓮沼むらづくり協議会（以下「協議会」という。）と称する。

(目的)

第2条 協議会は、市民協働による地域づくり活動を通じて、豊かな環境を守り、生きがいと元気を生み出す深い絆で結ばれた愛着あるふるさとづくりの実現に寄与することを目的とする。

(事業及び活動地域)

第3条 協議会は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

- (1) 福祉及び防災の推進に関すること。
- (2) 環境の保全及び産業の振興に関すること。
- (3) 教育の推進及び郷土文化の振興に関すること。
- (4) 前各号に係る活動の担い手の育成及び支援
- (5) その他目的達成のために必要な活動

(事務所)

第4条 協議会の事務所は、蓮沼むらづくり協議会会長宅に置く。

第2章 組織

(会員)

第5条 協議会の会員は、次に掲げるとおりとする。

- (1) 蓮沼地区の住民
- (2) 蓮沼地区の団体・事業者等で役員会の承認を得た者
- (3) その他会長が必要と認める者

(委員)

第6条 協議会の委員は、総会で承認された、各種活動団体の代表する者並びに会長が推薦する者をもって充てる。

(役員)

第7条 協議会に次の役員を置く。

- (1) 会長 1名
- (2) 副会長 2名
- (3) 事務局長 1名
- (4) 事務局員 若干名
- (5) 会計 1名
- (6) 幹事 若干名
- (7) 監事 2名
- (8) 顧問 若干名

2 役員は、委員の中から総会において選出する。

(役員の仕事)

第8条 役員の仕事は、次のとおりとする。

- (1) 会長は、協議会を代表し会務を総括する。
- (2) 副会長は、会長を補佐し会長に事故があるときはその職務を代理する。
- (3) 事務局長は、協議会運営に関する事務を所掌するとともに、組織構成や関係機関との連絡・調整等を行う。
- (4) 事務局員は、事務局長の職務を補佐する。
- (5) 会計は、協議会の運営及び活動に伴う事務及び経理を担当する。
- (6) 幹事は、担当する部会の運営及び必要に応じて会務を分担する。
- (7) 監事は、協議会の会計監査を担当する。
- (8) 顧問は、協議会運営に関する必要な助言を行う。

(役員の仕事)

第9条 第7条の役員の仕事は**2年**とする。ただし再任を妨げない。

2 補欠により選出された役員の仕事は、前任者の残任期間とする。

(部会)

第10条 協議会は、事業の推進を図るため次の部会を設置する。

- (1) 福祉防災部会
- (2) 環境産業部会
- (3) 教育郷土文化部会

2 各部会に次の役員を置く。

- (1) 部会長 1名
- (2) 副部会長 1名
- (3) 部会員 必要な人数

3 部会長は、会長が指名し、幹事に推薦する。

4 副部会長は、部会員の中から部会長が指名する。なお、部会長は、必要に応じ会計その他役員を置くことができる。

(部会員の任期)

第11条 部会員の任期は、**2年**とする。ただし、再任を妨げない。

2 補欠部会員の任期は、前任者の残任期間とする。

第3章 会議

(会議)

第12条 協議会の会議は、総会、役員会及び部会とする。

2 協議会の会議に必要と認めるときは、会議に所属する以外の者の出席を求め意見を聴くことができる。

(総会)

第13条 総会は、協議会の最高議決機関であって、委員をもって組織する。

2 総会は、会長が招集し、毎年1回、定期総会を開催するほか、会長及び役員会において必要と認めるとき臨時総会を開催する。

3 総会の議事は、出席者の過半数によって決する。

4 総会は、次の事項を決定する。

- (1) 地域むらづくり計画
- (2) 役員等の選任に関する事。
- (3) 予算及び決算に関する事。
- (4) 本規約の改廃に関する事。
- (5) その他、重要事項に関する事。

5 緊急を要する場合は、総会の決定事項について、役員会で決定することができる。ただし、この場合はこれを総会に報告し、承認を得るものとする。

(役員会)

第14条 役員会は、第7条に定める役員をもって構成する。

2 役員会は、必要に応じて開催する。

(部会)

第15条 部会は、必要に応じて部会長が招集する。

2 部会は、各所管事項の企画及び執行にあたる。

3 その他、部会の運営等に関し必要な事項は、部会長が定める。

第4章 財務

(会計)

第16条 協議会の経費は、賛助金、補助金、交付金、その他の収入をもって充てる。

(会計年度)

第17条 本会の会計年度は、毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

(会計等帳簿の整備)

第18条 協議会は、収入、支出及び資産を明らかにするため、帳簿を整備する。

(監査と報告)

第19条 監事は、会計年度終了後に会計監査を行い、総会に報告する。

第5章 その他

(委任)

第20条 この規約に定めるもののほか、協議会の運営等に関し必要な事項は、会長が別に定める。

附 則

この規約は、平成27年6月14日から施行する。

改廃履歴

【一部改定】(令和元年5月12日総会) 第7条・第8条に、事務局員・顧問を追記。

生まれ故郷の「記念碑」

故郷の深谷周辺の様子を描いた作品の一つが『お父さんの村』です。

平成十四年(二〇〇二)十月に「北川千代顕彰会」が、千代の功績を後世に残そうと、城址公園通り沿いに建立した文学(記念)碑には、当時の自然豊かな春の情景が伺える一文が刻まれています。



碑文



四月になると、
島の麦のほほのび、
なのははちりちりいりて
黄色へんきはじりり、
利根川へはいる
新川の土手には、
たんぽぽや、
れんげそうの花がさいて、
村はまるで絵のやうに
きれいになりました。
「お父さんの村」より

千代時世の句

猫のため少しあげおく 寒さかな
種子一つ 残さで散りぬ 寒椿

蓮沼がモチーフと思われる

千代の代表作

…ほら太東岬と銚子の犬吠埼との間に、九十九里浜っていつの間があるだろう。
ほとくのきた村はその長い海岸のちようごまん中ごろなんだよ。

この村は海に面しているけれども、漁をしていゝるのは浜ぞいの方の人たちだけで、あとはたいていお百姓だ。
いまはもう春で、地引きまきさうまうはじまるから元気づけたらどう。

(『村のたより』より)

…浜ではまい朝地引きあみの板木(ばんぎ)が鳴ります。
そしてそれを手つたえはだれにも魚をわけてくれるのです。

トシ子やテル子の友だちにも、そのすけつと(助つ人)に行くものはたくさんいました。

「だつても売るほどはくれぬ。」
「ねいさんだけにトシ子の方が慎重です。」
「それならうちで食つたらよかべ。そいだつて買わないでうちで得くだ。」

「そうだなあ。じゃ地引きに行くべか。」
「うん、行くべへんべ。」

(『小さいあらし』より)

千代の執筆作品や

翻訳作品



▲花の地球



▲青い麦の穂



▲みつばちマーヤの冒険

※掲載資料のご提供に感謝申し上げます。
・ご遺族様やゆかりの方々
・さいたま文学館様
・深谷市(人権政策課)様
・北川千代顕彰会(深谷市)様
・山武市歴史民俗資料館様

<2021年12月発行:蓮沼むらづくり協議会>

◇掲載の写真は、上記の皆様の提供の他、深谷市教育委員会様発行の冊子「深谷で生まれた児童文学作家:北川千代」から転載させていただきます。

山武市(蓮沼)ゆかりの児童文学作家

『北川千代』をご存じですか?



▲ 1894~1965

名作『絹糸の草履』で知られる、童話作家の北川千代が蓮沼の地に移り住んだのは、昭和十五年(一九四〇)のことであった。当時四十六歳であったが、蓮沼村殿下(現山武市蓮沼口)にある「汐入沼のほとりの家(水荘)」を仕事場として、『青い麦の穂』など数多くの作品を残した。

【蓮沼村史の記述から】

六十三の作品の内、三十三作品は蓮沼の仕事場で書かれました。

蓮沼の様子を作品にした『村のたより』や地域の方言を巧みに使った『小さいあらし』があります。「ゆかりの著名人」ながら、年配の方でさえ「名前しか知らない。」というのが現状のようです。

そこで、多くの方々の「理解・協力」を募りて発刊されている資料をもとに紹介します。

晩年の千代の肖像/肘をかけているのが下の写真の火鉢 →

▼晩年を過ごした蓮沼の自宅
「池すのおばさん」と呼ばれた由縁



▼千代が自宅で使用した火鉢



▲千代生誕の地
日本煉瓦製造(株)跡地
現在の資料館

▼愛用したメガネとペン



北川千代 誕生

名作『春やいづこ』で知られる童話作家の北川千代は、明治二十七年（一八九四）埼玉県大里郡大寄村敷免（現在の深谷市）で生まれました。父の後は、東京府の士族、母のちよは新町の富沢氏の人といわれています。俊は渋沢栄一が設立した日本煉瓦会社の工場長として活躍し、ドイツに留学して新しい技術を持ち帰り、日本煉瓦の品質を飛躍的に向上させました。

北川家は東京の西大久保にありましたが、家族とともに埼玉に赴任した後は、工場内の社宅で生活しており、千代もこの社宅で生まれました。

当時市内最大の工場の責任者の娘であった千代は優しい父母に囲まれ、経済的にも裕福でした。9人兄弟の長女であった千代には、3人の兄と妹が2人、弟が3人いました。

長兄の隆三と末弟の文夫は画家、弟の武夫は初めて『ピノキオ』を紹介した翻訳家、というように千代の兄弟には、絵画や文学を志す者が多く、これはドイツ留学の経験を持つ父の影響だとされています。



東京駅を模してレンガ調の造りで改築された JR 深谷駅

初代PTA副会長

昭和二十三年（一九四八）三月、蓮沼村小・中学校PTAが発足し、千代は初代副会長に就任します。子どものいない千代でしたが、自ら特別会員としての入会を申出たうえで、役員に推挙されたと聞きます。

また、学校へ自らの作品をはじめとする多くの図書を寄贈し、それは「北川文庫」と称され、子どもたちに親しまれました。



千代の残した児童文学

児童文学者としての道歩んだ千代は、多くの作品を残しました。中には竹久夢二が挿絵を添えるものもありました。

外国の童話の紹介にも熱心で、『アンデルセン童話』『家なき子』『ピーターパン』等、今でも親しまれている作品も手がけました。

昭和三十九年（一九六四）には、『みつばちマーヤの冒険』で、児童文芸家協会から第6回児童文化



千代 13歳

結婚と離婚

大正四年（一九一五）、人気作家の江口渙と結婚。大正八年（一九一九）、雑誌『赤い鳥』に童話『世界同盟』を発表します。以後、童話を新聞や雑誌に、少女小説を『令女界』『少女倶楽部』などに掲載しました。

大正十一年（一九二二）、二十二歳の時に江口と離婚し、その後、足尾銅山のストライキの指導者であった、高野松太郎と生活するようになります。



千代 29歳

蓮沼にきた千代

千代が蓮沼の地に移り住んだのは昭和十五年（一九四〇）のことでした。当時四十六歳であった千代は殿下区にあった与謝野鉄幹 晶子夫婦の別荘を二千五百円で購入しました。

この別荘は4反歩（4千㎡）程の敷地のほとんどが池で、蓮沼の網元であった小川新兵衛氏が書齋として建築したものでした。千代は「汐入りの沼のほとりの家」と呼ばれたこの家を仕事場として『青い麦の穂』『お父さんの村』『沼のほとり』など数多くの作品を残しました。

昭和十八年（一九四三）、夫の松太郎が蓮沼の地で永眠した後、周囲の温かい好意に包まれ、千代は蓮沼に永住することを決め、東京世田谷の自宅を売って本籍も移しました。

当時の日記には「殿下の祭り。屋根屋さんより強飯（赤飯）を、局長さんよりすしを、女医さんより餅をもらっ」とあります。

蓮沼村の住民となった千代は、戦中から戦後にかけて、村の人々から「池すのおばさんとか」「沼のおばさん」と慕われ、昭和四十年（一九六五）、七十一歳で永眠するまで、村の人になりきった生活をしていったといわれています。



大正15年頃の夫妻

私は、昭和十九年結婚し地元の医家へ嫁いだが、千代さんは私の夫と文字のことで気が合い、良くいらつちやっていた。

東京へは、一ヶ月に二回位お出かけになられ、其のつと子供達に田舎にはないモダンなプレゼントを下さった。



汐入沼のほとりの家（水荘＝池す）で

私も時々先生のお宅へお邪魔し、めずらしい物をごちそうになった。

特にご主人様の実家の能登から、美味しいお魚などが届きめずらしかった。人生についての事、又ご自分の歩いてきた道を「ごま」と話してくれた。

一番のショックは何と言ってもご主人さまの死でした。泣いて泣いて涙も出ないよ……

お葬式はごく簡単でした。それ以来特に文学に挑みました。思い出は尽きず、なつかしさが胸の中にぎゅぎゅ詰まっています。

平成十五年十一月十五日

T.K

「北川千代顕彰会」様宛ての手紙の一遍

功労章が贈られました。

千代が亡くなった後の昭和四十四年（一九六九）には、彼女の業績を記念して日本児童文学者協会により、新人童話作家の登竜門といえる「北川千代賞」が創設されました。

平成九年（一九九七）に桶川市にオープンした県立さいたま文学館では、千代のコーナーが常設展示され、貴重な資料を見ることができま



▲代表作:春やいづこ 絹糸の草履



▲翻訳作品:ピーターパン等

北川千代さんの思い出

千代さんは、私が女学校二年生（数え十四歳・昭和十四年）の春、蓮沼へ越していらつちやった。昔、我が家の別荘だった「池す」を買い、或る日おじちゃんと一緒に我が家に挨拶に見えた。「ステキな方だなあー」と思った。

私の両親と話が合い、夜遅くまでおいでになつた。

▼連続優勝Ⅱ第5・第6回全国選手権男子マラソン
▼金栗と各20日間て走破Ⅱ下関-東京間、樺太-東京間

伝説の“汽車より速かった男”



マラソンの父・金栗に見いだされた男

〔山武市(連沼)出身〕日本一の長距離ランナー
秋葉祐之

秋葉 祐之 (あきば やすけゆき)
1895 (明治28) ~ 1968 (昭和43) 連沼村出身
東京高等師範学校在学中からマラソン選手として活躍する。卒業後に中学校教諭となつてからも、金栗四三とともに、1919 (大正8) 年の下関-東京間マラソン、1922 (大正11) 年の樺太-東京間マラソンに出場。選手としての一線を退いた後は、1958 (昭和33) 年から、故郷の連沼村で教育長を務めた。

▲二人の熱き思いは箱根駅伝へ **秋葉** (㊟) **金栗** (㊟) / 出典：【東京坂道ゆるラン】WE B

- ◆日本が初めてオリンピックに参加した1912 (明治45) 年のストックホルム大会では、金栗四三 (かなりしろう) がマラソン競技に出場しました。金栗は「日本マラソンの父」とも呼ばれ、2019年NHK大河ドラマ「いだてん」でも注目された人物。
- ◆この金栗に才能を見いだされ、共に陸上競技の普及に努めたのが、旧・連沼村出身の秋葉祐之。
- ◆秋葉は、教員養成機関であった東京高等師範学校 (現・筑波大) で金栗の指導を受ける。在学中は、日本陸上競技選手権の25マイル (約40km) 競技で連覇を果たすなど、長距離ランナーとしての才能を開花。
- ◆卒業後、秋葉は理科の教員として木更津中学校 (現・県立木更津高) へ。教壇に立つ傍ら、オリンピック選手など一流の陸上選手を招き、生徒たちとの交流の機会づくりなど、陸上競技を熱心に指導。
- ◆1922 (大正11) 年には金栗と共に、約1600㊟を走破する樺太~東京間マラソンなど、多くの人々にマラソンの楽しさを伝えました。

さんむ 4月号 2019 No.157

▲「広報さんむ」2019年4月号で特集掲載 <中ページで紹介>

▼100年前の足袋シューズ (樺太-東京間の走破時)



▲この展示は、東京2020オリ・パラ大会の500日前を記念して、2019年3月に山武市が開催した特別企画展。

秋葉祐之 (1895-1968) のあゆみ

秋葉祐之にかかわる出来事		社会の出来事	
1895年 (明治28年)	5月 1日 千葉県武射郡連沼村 (現・山武市連沼) に生まれる		
1912年 (明治45年)		7月14日	第5回オリンピック・ストックホルム大会が開催され、金栗四三が日本人初マラソンの部に出場
1916年 (大正 5年)	3月30日 千葉県師範学校 (現・千葉大学) 卒業		
	4月 東京高等師範学校 (現・筑波大学) 入学		第6回オリンピック・ベルリン大会が第一次世界大戦の影響で開催中止
1917年 (大正 6年)	4月27~29日 「東海道五十三次駅伝競走 (京都~東京)」に出場し、関東組の優勝に貢献		
	5月 3日 校内徒歩部春期長距離大会で407人中1着になる (距離: 3里5町 (約12.3km)、時間: 40分15秒)		
	7月22日 富士登山競走第2組1着になる		
	9月30日 慶都50周年記念京浜間25里 (約98.2km) マラソン競走会予選会出場		
	11月 第5回日本陸上競技選手権大会男子マラソン1着 (距離: 25マイル(約40.2km)、時間: 2時間38分22秒)	11月 9日	世界初の社会主義国ロシア・ソビエト共和国が成立
1918年 (大正 7年)	2月 第1回10マイル短縮マラソン1着		
	10月 2日 校内徒歩部秋期長距離大会で1着になる (距離: 6里13町 (約25km)、時間: 1時間37分12秒)		
	11月 第6回日本陸上競技選手権大会男子マラソン1着		
	11月10日 大日本体育協会主催第6回陸上競技大会優秀記録賞を受賞する (11月3日開催10里競走、時間: 54分24秒)	11月11日	第1次世界大戦終結
1919年 (大正 8年)	春 校内徒歩部春期長距離大会で250人中1着になる (距離: 3里5町 (約12.3km)、時間: 41分15秒)	4月	ハリヤ足袋店が「ガハゼを取り除き甲紐をつけたゴム底の「金栗足袋」を発売
	7月22日~8月10日 金栗四三と下関-東京間1200kmを20日間で走破する		
1920年 (大正 9年)	3月26日 東京高等師範学校 (現・筑波大学) 卒業	2月14~15日	第1回東京箱根間往復大学駅伝競走 (箱根駅伝) 開催
		8月22日	第7回オリンピック・アントワープ大会が開催され、金栗四三がマラソンの部に出場
1922年 (大正11年)	8月 金栗四三と樺太-東京間1600kmを20日間で走破する		
1924年 (大正13年)		7月12日	第8回オリンピック・パリ大会が開催され、金栗四三がマラソンの部に出場
1958年 (昭和33年)	5月 1日 連沼村の教育長に就任		
1968年 (昭和43年)	10月 8日 73歳で死去		

金栗さんに素質を見いだされ、マラソンランナーとして開花

もう一人の「いだてん」
秋葉祐之さん

今年のNHKテレビの大河ドラマ「いだてん」東京オリムピック囃し」の前半の主人公は金栗四三さんです。1912年(明治45年)第5回ストックホルム大会に日本人で初めてオリンピックに参加「日本のマラソンの父」として知られる金栗さんですが、単に自分ランナーとして走るだけでなく、有為な人材を育てあげることも尽力します。金栗さんに見いだされた一人が蓮沼村(当時)の秋葉祐之さんです。

蓮沼村で農業を営む秋葉家に祐之さんが生まれたのが1895年(明治28年)。7人きょうだいの長男でしたが、学業優秀だったことから千葉師範学校(現・千葉大学)に進学します。「卒業前にマラソン大会がありました。先走しなければ卒業できないと言われていたのですが、父は疲れたら歩くつもりで……、ところが、いつまでもびたっと後ろについて来る人がいるので最後まで走らされてしまったようです。ゴールして挨拶すると、それが金栗さんだったといひます」

誠さんは、祐之さんから聞いた出会ひのエピソードを懐かしそうに語ります。4歳年上の金栗さんはこの前年にマラソンでストックホルム・オリンピック大会に出場。途中棄権に終わりますが、翌年には東京高等師範学校(現・筑波大学の)の徒歩部(陸上部)室長になり、鍛えがたいのある若手ランナーを探し訪ねていたのです。

過酷なレースに次々に挑戦

祐之さんは金栗さんに誘われて東京高等師範学校に進み、長距離ランナーとしての才能を開花させていきます。在学中の主な戦績は、第5回・第6回日本選手権25マイル(約40キロ)走で連覇。ちなみに第1・3回の優勝者は金栗さんです。

第2回富士登山マラソン競走は五目目の太郎坊から山頂までの10・5キロのコースで、祐之さんは2時間21分33秒で優勝。2位に10分以上の大差をつける圧勝でした。

この富士登山マラソンは、その後一般的となる高地トレ



下関—東京間1200kmゴール直前の祐之さん(写真中央左)と金栗四三さん(玉名市立歴史博物館提供=右の写真も)



下関—東京間1200kmを力走する秋葉祐之さん(写真中央)



父・祐之さんと金栗四三さんの思い出を語る秋葉誠さん

の富士登山マラソンは、その後一般的となる高地トレ

▼「広報さんむ」2019年4月号で特集掲載



ニングの重要性に先鞭をつけるものとなりました。さらに、22歳のときの「東海道五十二次駅競走」が圧巻です。京都—東京間516キロを23人のランナーがたすきをつないでゴールを目指します。祐之さんは区間最長距離(28キロ)となる掛川—藤枝

間を任せられます。ところがアクシデントが発生。その模様を「陸上競技のルーツを探る」(筑波大学陸上競技部OB・OG会)では次のように記しています。

「見附—掛川間では関東組の吉植泰選手(一高)が左足アキレス腱断裂のため走行不能になり、次走者の秋葉祐之選手(東屋高師)が車で運えに行つて西島から12里(48キロ)を4時間38分かけて走破するエピソードがありました」

また、1919年(大正8年)には祐之さんは金栗さんを訪ね「高師徒歩部に籍を置いて記念に、一緒に持久力テストをやりたい」と、下関—東京間の1200キロ口走を持ちかけます。日程を調整し、7月22日に下関をスタート。二人はマラソンを広く普及させる狙いもあり、沿道の人たちとふれあひながら20日間で走り切ったといひます。

また、1919年(大正8年)には祐之さんは金栗さんを訪ね「高師徒歩部に籍を置いて記念に、一緒に持久力テストをやりたい」と、下関—東京間の1200キロ口走を持ちかけます。日程を調整し、7月22日に下関をスタート。二人はマラソンを広く普及させる狙いもあり、沿道の人たちとふれあひながら20日間で走り切ったといひます。

蓮沼を訪れた金栗四三さん
東京高師を卒業した祐之さんは、本更津中学校(現・本更津高校)をはじめ全国の学校で生物の教師として教鞭を執ります。勉学のかたわらマラソンの楽しさを伝えていきました。

その集大成ともなるのが、金栗さんと二人で走った樺太—東京マラソン。1922年(大正11年)、20日かけて走り通しました。

「樺太や北海道では熊が出るというので、軍隊や土地の青年団が銅鑼を鳴らしながら伴走してくれたようです。マラソンの宣伝のためには走つたと言っていました。誠さんは祐之さんを偲びます。その後、祐之さんは、日本統治下にあった朝鮮の開城商業学校で校長を務めます。

「私が生まれたのは開城時代で昭和8年、帰国したのは16年。勉強も走ることも、父は厳しくなかつたです

日本全国を駆け巡り、青少年にマラソンの楽しさを広める



樺太—東京マラソンのユニフォームと足袋。足袋には「金栗足袋」の銘がある。大きさは10文(約24cm)と小ぶりである

ね。見込みがないと思われていたのかな(笑)。父については、周りの人から教えてもらうことの方が多かった。千葉から成東まで汽車と競走して勝つたとか……」

汽車がまだ今と比べて遅かった時代、走つたのは東金街道(国道126号)だとしても驚異的です。祐之さんは1958年(昭和33年)に蓮沼村の教員長に就任します。「その関係でしようか、金栗さんが二度ほどわが家に泊まっています。蓮沼小や緑海小で講演していただいたのですが、そのとき、自転車の荷台に乗せて送り迎えたのを思い出しました。道路はがたがただし、金栗さんは重し……」

マラソンを通して育まれた金栗さんと祐之さんの師弟愛は、晩年まで続いていたのです。

二人の快挙を伝える東京朝日新聞の見出し(大正11年8月27日)。記事には「下関—東京よりも距離は長かったが疲れなかった」「スイカを一日に三つくらい二人でくらいました」などの談話を伝えている

マラソンの両雄
秋葉祐之さん
樺太から三百四十里
を走破した新記録
西氏義典を元教で破る



樺太—東京マラソンのときの祐之さん(左)と金栗さん(玉名市立歴史博物館提供)

<蓮沼の偉人伝承事業>

蓮沼むらづくり協議会・令和7年度事業

〔山武市(蓮沼)出身〕球界屈指の快速球ピッチャー

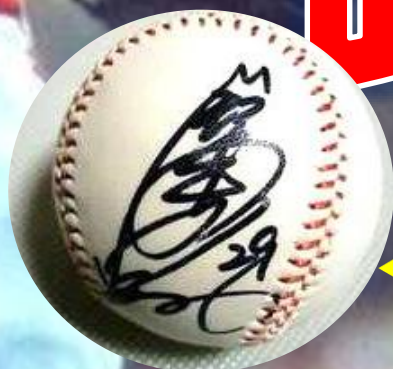
鈴木孝政

- ▼蓮沼中学校から成東高校へ進学、速球を武器に1年秋からエースの座に着く。
- ▼1972年のプロ野球ドラフト会議で中日ドラゴンズに1位指名されて入団。
- ▼150km台の伸びる快速球を武器に、ロングリリーフもこなす救援投手で活躍。

現「山武市

名誉スポーツ大使」

▲出典：「週刊ベースボールonline」Web
『球界200人が選んだ速球王ランキング
第12位・鈴木孝政』より



◀現役時のサインボール

▼【心揺さぶる名言】

「相手はごまかせても、ボールはごまかせませんでした。」
(1989/10/7の引退会見にて)

- ▼引退後は、野球解説者、投手コーチ、二軍監督を歴任
- ▼2016年「ドラゴンズベースボールアカデミー」初代校長に就任
- ▼2018年3月「山武市名誉スポーツ大使」に就任



▼蓮沼中

▼成東高

▼中日ドラゴンズ



Dragons

“背番号29”の由来(球団から提示エピソード)

↓昭和29年生まれで、実家がお肉屋さん。

選手↓投手コーチ(二軍・二軍)↓二軍監督

中日ドラゴンズ一筋

元 プロ野球選手(中日ドラゴンズ:投手)

鈴木孝政 (すずき たかまさ) 背番号 **29**

1954(昭和29)年7月生まれ 右投・右打 山武市(蓮沼)出身

選手歴

山武郡蓮沼村立蓮沼中学校
千葉県立成東高等学校(甲子園出場経験なし)
1972(昭和47)年ドラフト1位指名
初出場:1973(昭和48)年4月19日
最終出場:1989(平成元)年10月14日
ドラゴンズ一筋(実働17年:35歳で現役引退)



通算成績

586試合登板 124勝 94負 96セーブ (121SP)
(うち先発170試合) 防御率:3.49 奪三振:1006

タイトル・表彰・記録

最多セーブ王 1回(1975年)
最優秀救援投手賞 2回(1976年・1977年)
最優秀防御率賞 1回(1976年)
カムバック賞 1回(1984年)【28試合登板16勝8負】
オールスターゲーム出場 7回(1975~1978・1984・1985・1987)



経歴・etc

- ・快速球を武器にロングリリーフもこなす救援投手として活躍(セリーグで最も球の速い投手と称される)
- ・1982年シーズン途中から先発に移り、その後は技巧派の先発投手に
- ・長嶋茂雄・長嶋一茂親子と公式戦で対戦した唯一の投手
- ・著書「流汗悟道:野球で学んだ人生哲学」(1995年:海越出版社)
- ・コーチ歴 中日ドラゴンズ(1995年~1997年・2004年)
- ・二軍監督歴 中日ドラゴンズ(2012年・2013年)
- ・2016年「ドラゴンズベースボールアカデミー」初代校長に就任
- ・2018年(平成30年)3月「山武市名誉スポーツ大使」に就任



◀▲道の駅オライはすめまにゆかりの品を多数展示

